



管理委員長エレクトのスピーチ

ジェニファー・ジョーンズ
2026年1月13日

ラビシャンカールさん、パオラさん——ロータリー財団を代表し、あなたからの贈り物によって変化がもたらされる多くの人びとに代わって感謝申し上げます。

お二人の寛大さは、変化をもたらすだけでなく、先見の明に満ちています。

それは奉仕と思いやり、そして大胆な行動が、未来への道を切り開くことを世界に示しています。謙虚な寛大さと先見性が結びついたとき、不可能が可能になることを、ここにいる私たち全員に教えてくれます。

ご列席の皆さん、あらためてラビシャンカールさんとパオラさんに盛大な拍手をお送りください。

本日は「感謝」についてお話ししたいと思います。単なる気持ちとしての感謝ではなく、人びとを行動へと駆り立て、与える心を育み、世界を変える力としての感謝です。その力について考えるのに、今ほどふさわしい時はありません。

ロータリー財団は私にとって単なる組織ではありません。それは鼓動のように生きている存在であり、希望を現実に変える力です。私たちは、奉仕の確かな力を目の当たりにしています。思いやりが地域社会に波紋のように広がり、壁を越え、人びとの人生を支え、高めていくのです。ロータリーは単なるムーブメントではありません。共感と「優しさは行動で表すものである」という信念で結ばれた家族なのです。

ロータリーのリーダーとして、私たちは当然のことながら、戦略、奉仕、資金管理に焦点を当てます。しかし今日は、より静かでありながら力強いもの——「感謝の気持ち」に目を向けています。

1枚の感謝状、1本の電話、分かちあう一つひとつの物語が、寄付者へのメッセージとなります。それは、「あなたは大切な存在であり、あなたのご寄付には大きな意味がある。そして私たちは共に、変化を起こしている」というメッセージです。

私たちは毎年、年次基金、恒久基金、ポリオプラス基金への寄付を含む包括的なファンドレイジング目標を設定しています。2026-27年度の目標は5億米ドルです。これは野心的な目標ですが、達成できると確信しています。昨年度も達成できました。そして本日、(ラビシャンカール氏に敬意を表しながら)目標達成に向かって確かな弾みができたように思います。

ポリオプラスについてお話しします。ポリオ根絶は、私たち一人ひとりが実質的な変化を生み

出せる活動です。

ここで、皆さんにチャレンジしていただきたいことがあります。皆さんの地区でポリオの募金行事を一度も実施したことのない五つのクラブに対し、皆さんがメンターとなり、クラブが行事を開催できるよう支援してください。これらの各クラブで1,500ドルを集めることができれば、ゲイツ財団からの2倍額の上乗せが加わり、合計で4,500ドルになります。これは大きな相乗効果であり、真のインパクトです。皆さんのリーダーシップによって、年間5,000万ドルというポリオプラスの寄付目標に大きく近づくことができるのです。

今夜、ポリオ根絶のための「Deliver on the Promise」夕食会に集う私たちは、心を奮い立たせられるでしょう。これまで積み重ねてきた前進の物語、会場にあふれる情熱、そしてさらなる行動と感謝の力があれば目標を達成し、世界を変えられるという確信が、私たちに勇気を与えてくれるでしょう。

2021年12月下旬、当時の会長エレクトとして私が関与した、最も困難な決断がありました。それは、新型コロナウイルスの影響により、2022年国際協議会を完全にオンラインで実施するという決断です。

オミクロン株が急速に広がる中、世界各地からリーダーを一堂に集めることは、危険であるだけでなく、責任ある行為とは言えませんでした。

私は涙を流しました。既に荷造りを始めていた多くのガバナーエレクトも、同じ思いだったでしょう。

そのようなリーダーの一人に、デビーさんがいました。その翌年の5月1日、デビーさんは地区大会の開催を2日後に控えていました。しかし、彼女が心待ちにしていたこの行事にも、結局出席することは叶いませんでした。

デビーさんと夫のラッセルさんが、ノースカロライナ州で車の多い二車線道路を走行していたときのことです。対向車線の車が突然センターラインを越え、二人の車に向けて直進してきたのです。

80歳にして熟練のドラッグレーサーであるラッセルさんは、その瞬間に決断を迫られました。左には車の列。右にはコンクリートの排水溝。彼はハンドルを握りしめて車線に留まり、祈りました。

車は正面衝突。相手の運転手は命を落とし、デビーさんとラッセルさんは生き延びました。

デビーさんが後に語ってくれたのですが、その後、いくつもの事実が明らかになりました。

勤務時間外だった州警察官が事故を目撃し、数分以内に救急車が現場に到着しました。病院で、その警官がラッセルさんに告げました。もし左にハンドルを切っていたら、別の車と衝突し、全員が死亡していたかもしれないということ。そして、その車には、幼い子ども二人と祖母が乗っていたということ。

奇跡はそれだけではありませんでした。事故直後、現場にいた車の列に、たまたま整形外科の看護師がいたのです。彼女は、骨折して骨が露出していたデビーさんの腕を、棒とラッセルさ

んのベルトで冷静に固定しました。病院によると、この迅速な応急処置が結果を大きく左右したそうです。

さらにもう一つ、幸運なことがありました。デビーさんたちに衝突した運転手の車内には数千錠ものフェンタニル混入錠剤があり、もしそれらが街に流出していれば、どれほど多くの若者の命が失われていたか分かりません。しかし、そうはなりませんでした。ラッセルさんが車線に留まる決断をしたからです。

デビーさんは地区大会への出席を断念し、痛みに耐えながら回復に専念しました。しかし、その過程を通じて、彼女は自分が恵まれていることを感じました。そして今日、彼女とラッセルさんは奉仕への献身を続けています。ロータリー財団への支援が自分に計り知れない喜びをもたらしてくれると話すデビーさんは、最近、地区のために「ラッセル＆デビー・ドビー基金」を設立しました。悲劇の中でも命が救われ、希望が取り戻せることを知っているからです。

お二人の寛大なご寄付はアーチ・クランプ・ソサエティのレベルに達しており、本日この場で、お二人の正式なソサエティ入会をお祝いいたします。皆さんもお二人をお迎えいただき、感謝の気持ちを分かちあいましょう。

また本日は、モー・エイドさんのストーリーもご紹介したいと思います。

モーさんは、以前は国連パレスチナ難民救済事業機関(UNRWA)の人道支援スペシャリストでしたが、現在はロータリー平和センターのプログラムオフィサーとして、ウガンダのマケレレ大学とトルコのバーチェシェヒル大学の平和フェローを支援しています。

また、ロータリー世界本部で例会を行っているエバンストン・ライトハウス・ロータリークラブの熱心な会員でもあります。

昨年5月、私はモーさんがソーシャルメディアに投稿した文を読みました。

人道支援活動家である弟のイブラヒムさんが、赤十字で働いていた同僚とともに殺害されたという悲痛な投稿でした。イブラヒムさんは、前年に負傷しながらも、戦争の犠牲者を支援する活動に最後まで身を捧げていたのです。

モーさんの投稿の一節をご紹介します。

こうして、私たち家族は弟を失いました。

しかし、私の胸には一つの思い出が残っています。3年前、私は仕事でトルコに、弟はヨルダンにいました。

私は、弟がイスタンブールに来て共に時間を過ごすことを計画しましたが、それが彼と直接会う最後の機会になるとは思いもしませんでした。しかし私は、彼と会えたこと、そして思い出ができたことに感謝しています。

イブラヒム、ありがとう。32年間にわたる愛と笑い、幼い頃の取っ組み合い(もう少し負けてあげればよかった)、そして数え切れない冒険をありがとうございます。この世界に、君という素晴らしい人がいてくれたことに感謝している。安らかに眠れ、ハビービ(大切な人)。

この言葉は、私の心に深く響きました。言語や文化、国境を越えて、私たちが分かちあう思いは同じであることを教えてくれます。家族に願うものはただ一つ、愛と平和です。

ロータリー会員である私たちは、言葉だけでなく、行動を通じて平和を育むことによって結束しています。

ここで、チャックさんとキャロル・ストッキングさんご夫妻が立ち上げた、特別な活動についてお話しします。チャックさんは米国オハイオ州、トレド・ロータリークラブの会員です。

モーさんの喪失に深く心を動かされたチャックさんは、この友人を支える方法を見つけていたいと思いました。そして、ウガンダのカンパラにあるマケレレ大学平和センターのフェローへの支援を目的とする「イブラヒム・エイド基金」を創設しました。目標はこの基金を100万ドルとすることであり、最初の寄付10万ドルを数週間前に行いました。

友人の皆さま、モー・エイドさん、チャックさんとキャロルさんへの深い感謝の気持ちを共に表しましょう。

平和構築はロータリー財団が支援するあらゆる取り組み、プログラム、プロジェクトの根幹にあります。私たちは、平和が育まれる環境を創り出し、持続可能な変化をもたらす好循環を生み出すために力を入れています。

財団の活動を通じて日々、命が救われ、心が癒され、地域社会が強く支えられています。ロータリーは分断されていません。私たちは一つであり、すべての人びとのより良い未来を実現するために結束しています。

財団プログラムを通じて、皆さまの情熱を見つけてください。保健、安全な水、教育、環境保護、あるいは平和。どの取り組みも、優しさが広がる世界に貢献します。

最後にもう一つ、お話ししたいことがあります。

少し前、兄の家を訪ねていたときのことです。ある午後、夫と一緒に買い物に出かけました。私が探していたのは、「感謝の日記帳」とするための日記帳でした。毎日、感謝したことを三つ書き留めるという数年前の流行で、ポジティブ思考を引き出す助けになるというものです。私も、これは良いことだと思いました。

小さくて素敵な店で「私の一冊」となる日記帳を見つけたとき、私は夫にそっと、「これが私の感謝日記になるの」とささやきました。少し店内を見回してからレジへ向かい、店員さんがカウンターで綺麗な薄い包装紙で丁寧に日記帳を包む様子を眺めました。

すると店員さんはカウンターの反対側へ移動し、蓋に金色のラインが入った青い箱に日記帳を入れ、美しいリボンで仕上げ、カウンターの前に出てきて私に手渡してくれました。

「あなたのお話を、ついお聞きてしまいました。これがあなたの感謝の日記帳になるのですね。この本の最初のページに私のことを記してみてはどうでしょう。この本を売った男が、この買い物をさらに素敵な体験してくれた、とね」と彼は言いました。彼は確かに、最初のページに記されました。

ガバナーエレクトとパートナーの皆さん、間もなく分科会に移動されますが、そこにはインカ会長エレクトと私からの個人的な贈り物、感謝の日記帳とノートカードが用意されています。また今晚、2ページの感謝ツールキットが皆さんにメールで届きます。このキットには、メール・電話・手書きのメッセージなどで使う感謝の表現例やベストプラクティスが記されています。

ロータリーでの感謝は、単なる儀礼ではありません。それは、私たちが大切にしている価値の表現です。寄付者に感謝を伝えるとき、より良い世界を信じて行動してくださるその思いを讃え、その実現のために果たしてくださっている役割を称えます。

最後に、今日私が感謝の日記に書き留める三つのことをご紹介します。

一つ目は、ラヴィシャンカールさんとパオラさんへの感謝。人生を変える贈り物、そして何よりもお二人の温かな心に対する感謝です。

二つ目は、デビーさんとラッセルさんへの感謝。困難に立ち向かう勇気と忍耐、そしてロータリ一への深い愛情に、心からの感謝を捧げます。

三つ目は、モーさん、チャックさん、キャロルさんへの感謝。モーさんの敬愛するご兄弟の存在、そしてチャックさんとキャロルさんが示してくださいった癒しの心に、深く感謝いたします。

友人の皆さん、私は皆さんと共にこの道を歩めることに、尽きることのない感謝を抱いています。感謝をもって導くとき、私たちは資金を集めただけでなく、未来への希望を育むことができるからです。

感謝を、私たちの進むべき方向を示す羅針盤としましょう。それは目的を与え、友情を深め、共に築くレガシーをより強固なものにしてくれるのです。